

W2章 格

優先格		非優先格	
主格	目的格	一般格	
〇 ₁ , が	を _目 : を	に, へ, で, と, から, より, まで, 〇 ₂	
主格	客格		

この章では、「格」に関わる事項を扱います。

W2.1 格 (8)

- [1] 格 (8)
- [2] 格の表示位置 (9)
- [3] 構造を伝達する (10)
- [4] 文中に無格の実詞はない (10)

W2.2 主格と目的格 (11)

W2.3 優先格 (12)

- [1] 主格と目的格は優先格 (12)
- [2] まず優先格が決まる (14)
- [3] 非優先格の中の優先性 (15)
- [4] 優先性の確認 (16)

W2.4 目的格ではないが、格(意味関係)の自明なもの (17)

W2.5 同名格 (18)

W2.6 すべての格を把握する (20)

W2.1: 格

格……実体と属性の論理関係

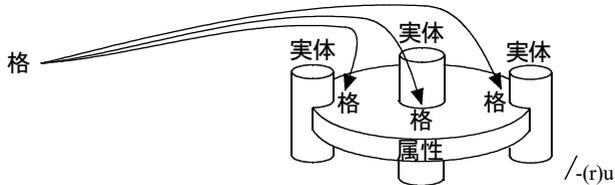
『文法』1章, 2章, S1.1

[1] 格

実体を名詞, 属性を動詞と考えると, 分かりやすくなります。

「格」とは, 構造において, 実体と属性を論理(意味的に)結び付ける力です。

「格」とは, 実体と属性の論理関係(意味関係)であるということもできます。

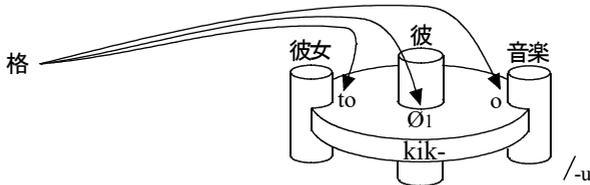


図W2-1 格は実体と属性を論理的に結びつける

1つの例で考えてみましょう。

彼- \emptyset_1 彼女-to 音楽-o kik-u (彼, 彼女と音楽を聞く)

構造は下図のようになっています。



図W2-2 彼- \emptyset_1 彼女-to 音楽-o kik-u

この例で, 実体「彼女, 彼, 音楽」は, 属性「聞く kik-」と次の格(論理関係)を持っています。

実体「彼女」……属性「聞く kik-」と 格「to」(一緒に) の論理関係

実体「彼」……属性「聞く kik-」と 格「 \emptyset_1 」(動作の主体) の論理関係

実体「音楽」……属性「聞く kik-」と 格「o」(動作の対象) の論理関係

日本語では, 格(論理関係)は, 下表のように, 「主格」と「客格」の2種類に分類できます。11の格として示されます。

表W2-1 主格と客格のリスト

主格	客格
\emptyset_1 , が	を, に, へ, で, と, から, より, まで, \emptyset_2

問W2-1 本文法でいう「格」と, 国語文法のいう「格」とは同じものですか。

問W2-2 構造を作る3要素とは, 実体と属性と何ですか。その機能は何ですか。

問W2-3 構造において, 実体が何の格にもないということはありませんか。

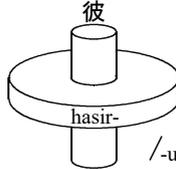
[2] 格の表示位置

「格」は構造上では、属性の板での位置として表示されます。

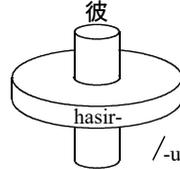
主格 「〇1格」と「が格」は「**実体は、その属性の主体である**」という論理関係を示し、属性の板の中央(ないしは、周辺から離れた内側)に位置を取ります。
(「〇1格」と「が格」の違いについては、S1.3 参照。)



図W2-3 主格は中央に

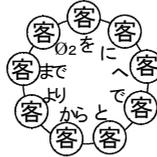


図W2-4 彼〇1 hasir-u



図W2-5 彼が hasir-u

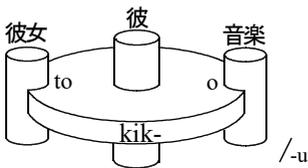
客格 そのほかの格は、「**実体は、その属性の客体である**」という論理関係を示します。客格は属性の板の周辺に位置を取ります。



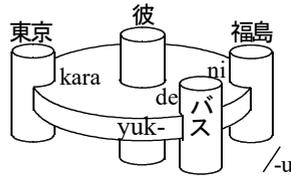
図W2-6 客格は周辺に

構造例

それで、既出の例「彼、彼女と音楽を聞く」の構造は左下図のようになります。 「彼、東京から福島にバスで行く」なら、構造は下右図のようになります。



図W2-7 彼-〇1 彼女-to 音楽-o kik-u



図W2-8 東京-kara 福島-ni バス-de yuk-u

「は wa」は格を表しません。目立たせるだけです。(S1.4 とS1.5 を参照。)

彼-〇1-wa 彼女-to-wa 音楽-o kik-u。

東京-kara 福島-ni-wa バス-de yuk-u。

これ-〇-wa yom-u。あれ-〇-wa yom-ana-k-i。 (□ の中は発音しません。)

[3] 構造を伝達する

Cコラム5

構造は、日本語話者の頭の中にある判断を表します。この構造を他者に伝えるときは、この構造のままでは伝えられませんから、この構造を1要素ずつ音声による言語形式で描写して、時間をかけて音声(文字)で伝えます。文にします。音声で描写すると、それぞれの要素は次のような詞になります。

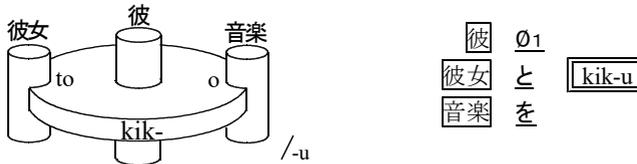
実体(主体, 客体) → 実詞(主語, 客語)
 格 → 格詞
 属性 → 属性詞(動詞, 形容詞, 態詞, 助動詞)

格は実体と属性の論理関係なので、格詞は、次のように **実詞** と **属性詞** の間に置きます。(英語では、実詞と属性詞の位置が入れ替わります。)

実詞 格詞 **属性詞**

図W2-9 格詞は実詞と属性詞の間に置く

これを「彼の彼女と音楽を聞く。」という文で示せば、格詞が実詞と属性詞の間にあることが確認できます。

図W2-10 彼-0₁ 彼女-to 音楽-o kik-u

[4] 文中に無格の実詞はない

構造では、構造図に見るように、実体は必ず属性と格関係があります。ということは、つまり、実体の実詞として文中にあるときは、必ず属性詞と格関係を持っていることになります。無格ということはありません。

明日映画を見る。

の例で、「明日」という実詞は、「に」などの格詞を伴っていないので、「無格」のようです。が、「明日」は、属性詞「見る」との論理関係では「動作の生起する時」を表します。**格(論理関係)はありますが**、わざわざ格を表示しなくとも意味が分かるので**格詞は必要ありません**。主格以外のこのような格を「0₂格詞」で表します。

明日0₂映画を見る。

この0₂格は、「格はあるのに格詞がなくて済んでいる格」で、いわば「無格詞の格」です。……文中には**無格の実詞(名詞)はありません**。**無格詞の実詞**があるわけです。

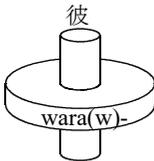
ある属性があれば、**主格実体**（主語）は無意識にもせよ、必ず存在します。また、その属性が他動詞であれば、**目的格実体**（目的語）も必ず存在します。

必ず存在するものは、格詞を使って論理関係を示す必要はありません。

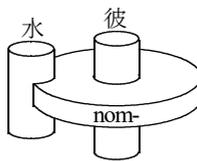
- (1) 彼，笑う。 （属性は**自動詞**）
- (2) 彼，水，飲む。 （属性は**他動詞**）
- (3) 彼，おもしろい。 （属性は**形容詞**）

主語		自動詞
主語	目的語	他動詞
主語		形容詞

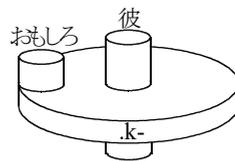
図W2-11 必ず存在する要素



図W2-12 自動詞



図W2-13 他動詞



図W2-14 形容詞

歴史的には、もとは、主格や目的格の表示は「0」でした (pp.24-25, pp.28-31)。上の例の「彼」や「水」にあたるものは、もともと、伝達にあたって格を表示する必要はありませんでした。しかし、中世になって、漢文訓読の影響で、格関係を明示することになりました。それで、以下のようなことになりました。

第1主格はそれまで同様、「0₁」で示されましたが、音形式がないので、「は」を伴うことが多くなりました。「は」は格を表しません。「**相対化描写詞**」です。）

- (1a) 彼₀₁は 笑う。 （自動詞）
- (2a) 彼₀₁は 水を 飲む。 （他動詞）
- (3a) 彼₀₁は おもしろい。 （形容詞）

第2主格、**第3主格**は「が」で示されるようになりました。

- (1b) 彼が 笑う。 （自動詞）
- (2b) 彼が 水を 飲む。 （他動詞）
- (3b) 彼が おもしろい。 （形容詞）

目的格は「を」で示されるようになりました。

- (2c) 彼₀₁は 水を 飲む。 （他動詞）
- (2d) 彼が 水を 飲む。 （他動詞）

現代語では、特に書き言葉では、格詞は明示されます。(0₁格、0₂格を除いて)

問W2-4 他動詞があれば、必ず何がありますか。

W2.3 優先格

『文法』p.101

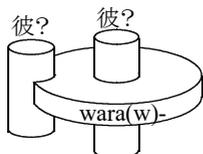
[1] 主格と目的格は優先格

「格」には「優先格」と「非優先格」があります。

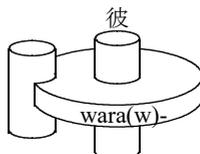
たとえば、「彼()笑う」という表現の()の中に格詞を入れてください、と言われたら、どの格詞を入れますか。(下左図。「は」は格詞ではありません。)

自然な感覚では、主格詞である「01」か「が」です。

彼(01)笑う、彼(が)笑う (下右図)



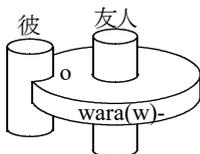
図W2-15 彼()笑う



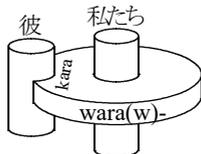
図W2-16 彼が笑う

しかし、「に、を、と、から、より」も可能性はあります。

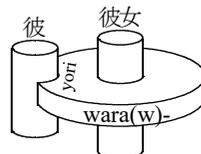
彼(に)笑う、彼(を)笑う、彼(と)笑う、彼(から)笑う、彼(より)笑う



図W2-17 彼を笑う



図W2-18 彼から笑う



図W2-19 彼より笑う

とはいえ、最初に思いつくのは主格詞です。

では、次の表現では()の中にどの格詞を入れますか。

彼、お茶()飲む (下右図)

主体はもうありますから、自然な感覚では「を」格詞です。……彼、お茶(を)飲む



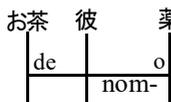
図W2-20 お茶()飲む



図W2-21 お茶を飲む

しかし、「で、と、から、より」も可能性はあります。

お茶(で)飲む、お茶(と)飲む、お茶(から)飲む、お茶(より)飲む



図W2-22 お茶で飲む



図W2-23 お茶と飲む



図W2-24 お茶より飲む

とはいえ、この場合、やはり最初に思いつくのはを格詞(目的格詞)です。

つまり、主格と目的格は優先度が高いといえます。

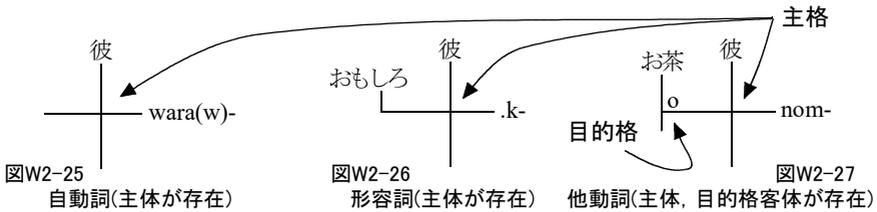
表W2-2 主格・目的格は一般格より優先度が高い

優先格		非優先格	
主格	目的格	一般格	
01, が	を _目 ; を	に, へ, で, と, から, より, まで, 02	
主格	客格		

「を_目」は「目的格の(を)」を示します。「を格」すべてが目的格ではありません。

なぜ主格と目的格が優先格？

すでに述べましたが(p.11), ある属性があれば, その属性の持ち主, 主格実体 (主体・主語) は必ず存在します。また, 属性が他動詞であれば, その動詞の目的格実体(目的語) は必ず存在します。つまり, 実体があれば, まず, 主格実体, 目的格実体と見なされやすいので, 主格, 目的格の優先度が高いわけです。



優先格実体は、自明のときは、表現されないことが多い

主格が「私」の場合, 次の()には何が入るでしょうか。
 彼 () 見ました。(図W2-28, 図W2-29)
 「を」でしょうか。主格実体が「私」のときは, 「私」が省略されるので, 目的格実体が入るとされるからです。

日本語では自明な要素, つまり, 分かっているののでわざわざ言う必要のないこと, は表現しないことが多いのですが, 自明な要素が優先格実体の場合は特に省略されることが多いです。

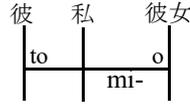
いま, 主格実体が「私」で, 目的格実体が「彼女」であることが, 相手にすでに伝わっているとき, 両者は省略されやすいので, ()にはもう優先格が入ることはなく, 非優先格が入ることになります。(図W2-30)
 彼 (と) 見ました。



図W2-28 彼()見た



図W2-29 彼(を)見た



図W2-30 (彼女を)彼(と)見た

問W2-5 主格と目的格は他の格に比べて何が違いますか。

[2] まず優先格が決まる

図では mas-u の部分を省略

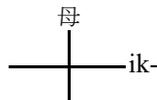
日本語では優先格から決まっていきます。たとえば、次の文では () の中にどの格詞が入るのでしょうか。(まだどの格も決まっていません。)

母 () 行きます。(下左図)

優先格を持つ実詞がないので、()の中には、ふつう主格の「が」(「0₁」)が入るでしょう。(下右図)



図W2-31 母 () 行く



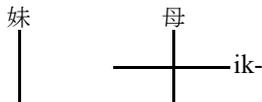
図W2-32 母(が) 行く

主格が決まったあとでは、次の()の中には何が入るでしょうか。

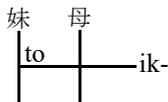
母が 妹 () 行きます。(下左図)

動詞が自動詞であり、もう1つの優先格の目的格はありえないので、非優先格の「と」が入るでしょう。

母が 妹(と) 行きます。(下右図)



図W2-33 母が 妹() 行く



図W2-34 母が 妹(と) 行く

では、他動詞の場合はどうでしょうか。

母が 兄 () ほめます。(右図)

動詞は他動詞ですから、入るべきはもう1つの優先格「を」です。一般格(と、から等)よりは目的格が優先しています。

母が 兄(を) ほめます。(右図)

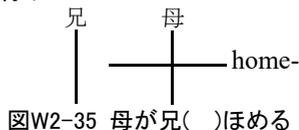
では、両優先格の決まった次の場合はどうでしょう。

母が 兄を 姉 () ほめます。(右図)

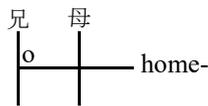
2種類の優先格はすでにありますから、非優先格「と」が使用されます。

母が 兄を 姉(と) ほめます。(右図)

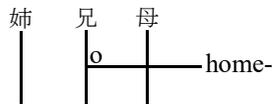
つまり、このように、自然な感覚では、まず優先格が決まったのちに非優先格が出ます。



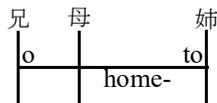
図W2-35 母が兄()ほめる



図W2-36 母が兄(を)ほめる



図W2-37 母が兄を姉()ほめる



図W2-38 母が兄を姉(と)ほめる

[3] 非優先格の中の優先性

発話者・聞き手の意識内での優先性

非優先格(主格・目的格以外の格)に属する格の優先性は動詞(属性)によって、また状況のとらえやすさの傾向によって決まります。

[集まる] たとえば、

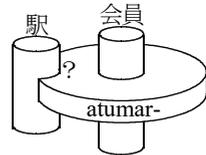
会員は駅()集まる。(右図)

の()の中には「に」が入るでしょう。

会員は駅(に)集まる。

「集まる」という動詞では、「集まる場所を示す「に」格」が優先性を持っています。とはいえ、「へ」「で」「から」「より」も可能ではあります。

会員は駅(へ/で/から/より)集まる。



図W2-39 駅()集まる

[帰る] 次の場合はどうでしょう。

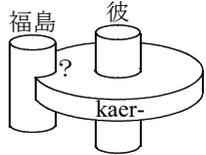
彼は福島()帰る。(右図)

これは、「に」か「へ」でしょう。

彼は福島(に/へ)帰る。

しかし、「から」の可能性もあります。

彼は福島(から)帰る。



図W2-40 福島()帰る

「帰る」という動詞は、意識内で、今いる場所を起点にしやすく、実詞は帰着点を示しやすいので、「から」よりは「に、へ」格の優先性が高いようです。

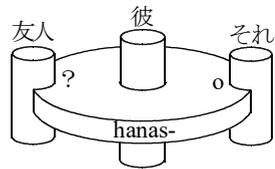
[話す] 次の場合は「に」か「と」でしょう。

彼はそれを友人()話す。(右図)

彼はそれを友人(に)話す。[情報の伝達先]

彼はそれを友人(と)話す。[話し相手]

動詞が「話す」の場合、実詞は情報の伝達先としてのほうが、話し相手としてより優先性が高いようです。



図W2-41 友人()話す

しかし、これは状況をどのように捉えやすい場合かによって異なります。

以上は一例ですが、このように、非優先格の場合は、動詞によって格の優先性が異なるといえます。また、状況をどう把握しやすい場合であるかによっても格の優先性が異なるといえます。

この、意識内での格の優先性は、特に実詞(名詞)を動詞で修飾するときに影響があります。このことについては次項とA 16.7を参照してください。

問W2-6 「運転者()見た」の()の中に入る格詞は何ですか。

[4] 優先性の確認

格情報が消える……優先格で解釈

A16.6 3)

たとえば、次の文は、すぐに理解できるでしょう。

(1) 彼が歩いている 道は新道だ。

では、次の文は、上と同じくらい理解しやすいでしょうか。

(2) 彼が歩いている 女性は女優だ。

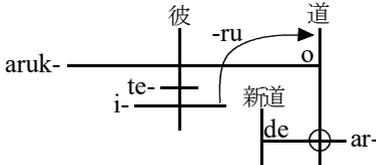
(2)では、女性の上を歩いているかのような印象になってしまいます。

なぜこのようなことが起こるのでしょうか。……「歩く」という動詞では、**優先格は歩く場所を示す「を格」**だからです。「女性」も「を格」で解釈しようとしています。

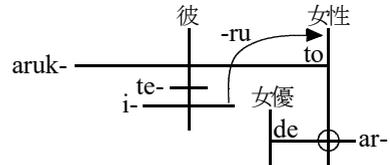
(1a) 道を歩く

(2a) 女性を歩く(?) 「女性」は歩く場所?

(2)の場合は、「女性」は「を格」ではなく、**非優先格の「と格」**に立っているのです。



図W2-42 彼が歩いている道は新道だ



図W2-43 彼が歩いている女性は女優だ

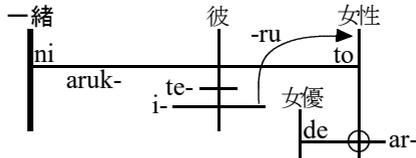
(2b) 彼が女性と歩いている (上右図)

実体を属性で修飾すれば、属性に対するその実体の格情報は消えます。「女性」を修飾しているので、「歩く」に対する「女性」の格情報は消えます。

(2c) 彼が歩いている 女性 (「女性」が to 格にあるという情報は消えます。)

実体(名詞)が動詞で修飾されているため格情報がない場合は、実体が優先格にあるものとして解釈されます。格の優先性はこのことから検証できます。……実体が非優先格にある場合はそのことを知らせる「**補助的な情報**」が必要になります。この例文では「一緒に」という情報が「補助的な情報」です。

(2d) 彼が一緒に歩いている女性は女優だ。



図W2-44 彼と一緒に歩いている女性は女優だ

このように、どの格が優先性を持つのかは、実体を動詞で修飾する場合にも確認できます。(非優先格に立つ実体を修飾する場合は、**補助的な情報**が必要です。)

問W2-7 「つかまえた警官／男／学生」各実詞の「つかまえる」に対する優先格は?

W2.4: 目的語ではないが、格(意味関係)の自明なもの

〇格 → を格

事象の成立する場所を表現する格 を格の同名格

「水飲む」のように「水」が他動詞「飲む」の目的語であれば、「水」は優先格にあり、わざわざ格表示をしなくとも、「水」と「飲む」の論理関係は伝えられます。ただし、格関係を表示したい場合や、書き言葉の場合は、「を」を使って格を表します。

ところで、次の例のような場合はどうでしょうか。

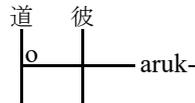
道_歩く 空_飛ぶ 海_泳ぐ

実体(名詞)は動詞の目的格になく、優先格にはないのに、格表示はなくとも格ははっきり分かります。これは、「実体(名詞)が動詞の示す事象の実現する場所である」として捉えられていて、他の可能性がなく、格関係が自明であるからです。

このような場合に、格関係を明示しようとするとき、特に書き言葉では、「を」を使って表します。

道を歩く 空を飛ぶ 海を泳ぐ

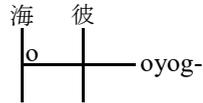
他動詞の目的語の表示方法と同じ「を格」になりますが、これは同名格であり、同じ格(目的格)であるわけではありません。(p.24, p.25, p.27 の⑦を参照)



図W2-45 道を歩く



図W2-46 空を飛ぶ



図W2-47 海を泳ぐ

〇格 → 〇2格

事象の成立する時を現在を基準点として表現する格

上に述べたのは、「事象の実現する場所」が、歴史的に「〇格」表示から「を格」表示へと変化した場合です。次に見るのは、「事象の実現する時が、現在を基準として表現される場合」です。この場合は、「〇格」表示のままです。

明日_踊る 今_話す 昨日_見た

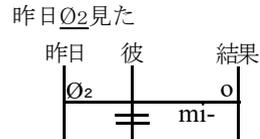
上述の「場所」に関わるものと異なり、この「時」に関わるほうは、まだ音形式で認識できる格詞で表現されていません。本文法では「〇2格詞」として表現します。



図W2-48 明日〇2踊る



図W2-49 今〇2話す



図W2-50 昨日〇2見た

問W2-8 「夜道を歩く」の「夜道」は「歩く」の目的語ですか。

W2.5 同名格

『文法』2.3

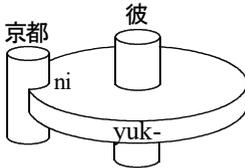
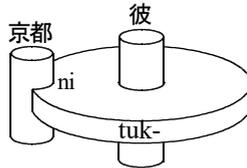
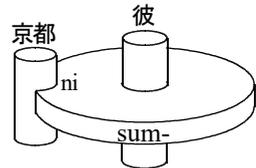
同名格

「同名格」……異なる「格」なのに同じ「格詞」で表される格

以下の「に格」は異なるものです。(「名詞と動詞の論理関係」が異なっています。)

(1) 京都に行く 「に格」は、実体が移動の目的地を示す。(英語なら to 格)(2) 京都に着く 「に格」は、実体が到着点を示す。(英語なら at 格)(3) 京都に住む 「に格」は、実体が住む場所を示す。(英語なら in 格)

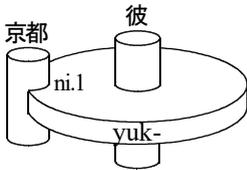
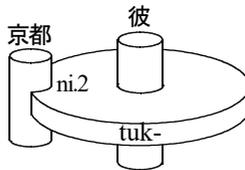
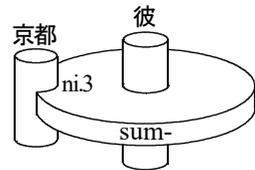
格は異なるのに同じ格詞「に」で示されるので、これらを「同名格」とよびます。同名格は格詞が同じなので、構造図にすると下の3図のように、同じようになってしまいます。ここには「に」で表現される3つの同名格があることとなります。

図W2-51 京都に行く図W2-52 京都に着く図W2-53 京都に住む

では、構造図上で格の違いを表すにはどうすればよいのでしょうか。ひとつ考えられるのは、「に1」「に2」「に3」のように、番号を付けて違いを表すことです。

(1a) 京都に1行く ……「に格1」は、実体が移動の目的地を示す。(2a) 京都に2着く ……「に格2」は、実体が到着点を示す。(3a) 京都に3住む ……「に格3」は、実体が住む場所を示す。

このようにした場合、構造図はこうなります。

図W2-54 京都に1行く図W2-55 京都に2着く図W2-56 京都に3住む

「に格」の同名格はいくつある？

上では、「に」の同名格を3つ挙げました。しかし、「時」「方向」「目的」「原因」等々を加えれば、同名格は100以上はあることになるでしょう。いったい「に格」にはいくつの同名格があるのでしょうか。数えられるのでしょうか

問W2-9 なぜ「同名格」が生じるのですか。

同名格を構造図に示す

ある国語辞典の「に」を見てみます。「格詞」ですが、国語文法では「格助詞」です。

①時点・期間を表す。……3時に電話する。桜は春に咲く。

②事物の存在する場所を表す。……庭に椅子がある。

⋮

この国語辞典には、①から始まって⑳まで異なる意味が並んでいます。これは、別の国語辞典では⑮までとなっています。

これらの意味は、本文法でいう「格(名詞と動詞の論理関係)」です。上の例の①②は異なる格ですが、同じ「に」で表現されるので、「同名格」です。

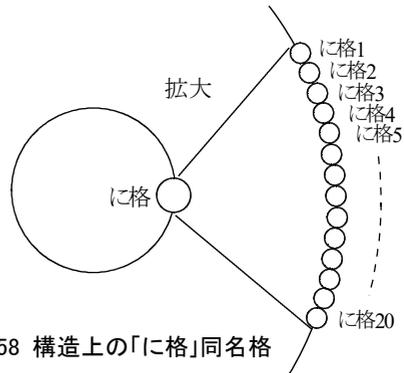
つまり、ある辞書は「に」の同名格を20に分類し、別の辞書は15に分類しているわけです。(さらに別の辞書では古語を含めて26に分類しています。)

に格1 に格2 に格3 …… に格15 (……に格20) (……に格26)

図W2-57 「に格」の同名格

同名格を構造図で示すときは右図のようになればよいのではないのでしょうか。

20というのはある国語辞典で分類されている分類枝の数です。構造伝達文法では、さらに細かく分類する必要があると考えています。



図W2-58 構造上の「に格」同名格

格を分類する

上述のように、「に格」の同名格の分類枝の数は辞書によって異なります。基準が異なるわけですが、私たちはどのような基準を持てばよいのでしょうか。

本文法ではさらに細かく分類する必要があると考えています。たとえば、上の①では「時点」と「期間」を1つの同じ分類枝の中に入れていますが、本文法では分けるべきものと考えます。……いったい、格はどのようにすれば、そのあり方の全体が把握できるのでしょうか。把握するための基準はどのようなものになるのでしょうか。その基準を知りたいと思います。

問W2-10 「で格」の同名格はいくつぐらいありますか。

格を捉える基準

捉え方が見つければ、それは普遍性を持つはず

そもそも「格」そのものはいくつあるのでしょうか。それを知るためには「実体と属性の論理関係」を数えあげればよいはずです。(正確ではありませんが、「名詞と動詞の論理関係」と言いかえてもいいでしょう。)……宇宙、世界には、「名詞の表す事物の存在のしかた」はいくつあるのでしょうか。

すべての「格」のあり方を、科学的に知ることはできるのでしょうか。格の全体を体系的に捉える方法はいったいあるのでしょうか。見つかるのでしょうか。

「格」の捉え方が見つければ、それは普遍性を持つはずです。それぞれの格に番号を割り当てれば、格を番号で表現できるはずです。

たとえば「3429の格は、実体が移動の出発点を表す格で、日本語では『から』で表現され、モンゴル語では『-aac』、韓国語では『-에서』、中国語では『从』、英語では『from』、スペイン語では『de』、ロシア語では『из』で表現される」と言えることになるでしょう。

表W2-3 格分類表の例

格の番号	格の意味	日本語	モンゴル語	韓国語	中国語	英語	スペイン語	露語
.....								
3400	3428							
	3429 移動の出発点	から	-aac	-에서	从	from	de	из
	3430							
.....								

国語学に認識のない格

格を捉えようとしても、格の定義そのものが違っていれば、格を捉えることは無理です。国語学は格の定義を西洋の文法にならって「文中のある語句（特に名詞・代名詞）が他の語句に対してもつ文法上の関係。」としていましたので、格の捉え方が違っていました。…それで、国語学では「の」を格として捉えてしまい、かつ、「01格」「02格」を格として認識していませんでした。(「の」はW4章、W5章)

[01格] 本来的な主格です。これについては本書 pp.28-29 に述べていますので、参照してください。この「01格」の存在については本文法だけが指摘しています。国語学には認識がありません。

[02格] 「あすやる。」という文の中の「あす」は「やる」と格関係を持っていて、本文法ではこの格を「02格」として捉えますが、国語学には「あす」が格を持つとの認識がなく、名詞「あす」が副詞的に使用されたものと見えています。